

超短編五話

人生の肴たち

絵夢ロイ

イブの夜

イブの夜です。

三歳になった千恵ちゃんが寝る時間になりました。

「良い子で寝ていると、きっとサンタさんがやってきますよ。」とお母さんは言いました。

いつのまにか千恵ちゃんは眠ってしまいました。

夜中です。

千恵ちゃんは物音で目がさめました。

だれ？サンタさん？

千恵ちゃんはそう思って起き上がりました。

見ると白ひげを生やしたおじいさんが向こうを向いて大きな白い袋からゴソゴソ何か出しています。

「あっ、やっぱりサンタさんだ。」

と思うと千恵ちゃんはそっと後ろから近づきました。

サンタの肩のところからニューッと首を出しました。

急に横から頭が出てきたので、ヒエーとサンタは驚いてしりもちをついてしまいました。

「あいてて。」

と言ってサンタは後ろを振り向きしました。

千恵ちゃんと目が合いました。

「みーつけた。サンタさん。」

千恵ちゃんが言うと、サンタはニッコリして言いました。

「ほーらプレゼントだよ。」

千恵ちゃんはピンクの包みを一つもらいました。

「ねえ、開けていい？」

「どうぞ。」

サンタにそう言われて千恵ちゃんは包みを開けました。

そこにはほしかったお人形が入っていました。

「ありがとう。サンタさん。千恵からもプレゼントがあるよ。」

千恵ちゃんは昼間クレヨンで書いたサンタの絵をあげました。

「これわしよりずっとカッコイイよ。」

とサンタは照れてます。千恵ちゃんと言いました。

「本物のサンタさんはもっと素適だよ。」

それを聞いたサンタは心がジーンと熱くなりました。

「千恵ちゃんありがとう。おかげで心が温まったよ。次の子のところに行かないとね。」

そう言うとサンタは闇に見えなくなりました。

次の日、千恵ちゃんはお母さんにサンタのことを話しました。

頂いたお人形も見せました。

本当にサンタが来たんだねって、ママも幼い頃サンタと会ったことを思い出しました。

いつから、サンタが来なくなったんだろう。

ママは思い返そうとしましたが思い出せません。

子供の頃見えていたものが今では見えません。

フランダースの犬を読んだとき、最後の場面で

ちょっぴりあの頃の気持ちになれたことを思い出しました。

今日はイブ。間もなく大晦日。

マッチ売りの少女とフランダースの犬を読んでもみようかなと

ママは思いました。

ミサイルの危険性

「臨時の緊急ニュースをお伝えします。アメリカ国防省によると、日本に向けてミサイルが接近中です。コースは東京を目指していると思われ、このままいくとあと30分程で飛来します。大至急安全なところへ避難してください。」

突然テレビとラジオの全ての放送が中断され、このニュースが流れた。時刻は月曜日の午前10時であった。主婦は家事を行い、会社では新しい週の激しい経済戦争が始まっており、ニュースを見た日本人は意外と数が少なかった。そのニュースを見た人たちから、家族への連絡が開始された。多くは携帯電話へ連絡を取ったため、あっという間に回線がパンクして、携帯電話は何の役にも立たなかった。かろうじてつながった固定電話からそのニュースは伝わり、後は口伝えでどんどん広がった。

しかし、既に最初のニュースから20分が経過していた。警察やテレビ局へ問い合わせた人たちも多くいたが、結局回線はつながらなかった。唯一テレビとラジオで繰り返されるニュースのみが情報源となった。既に時刻は10時20分。だれも半信半疑で何処に逃げようとしているわけでもなかった。刻一刻と時間が経過したが、このような理由で東京にパニックは起こらなかった。

10時30分である。まばゆい閃光が東京の小さな一角を包んだ。それは比較的小規模な爆発であり東京の多くの人は爆発があったことすらわからなかった。2発目は飛んでこなかったが、メディアが1発目の着弾を報道したため大パニックが発生した。東京で発生したパニックは日本中がやられるというデマとともに瞬く間に各地に伝播した。平和ボケの人々は始めて恐怖に襲われ、われ先にと逃げ惑い治安が失われた。後で集計すると爆発で亡くなった人の30倍もの人がパニックの時死んでいた。

傷顔事件

2月の後半である。

浩一は会社から帰ると居間に行きテレビのニュースを途中から見た。

どうも各地で顔を傷つける事件があったようだ。

浩一には高校生になる娘がいる。

最近帰りが遅いため注意しようと思っていたところであり、

いい機会だと思い娘に言った。

「いいか、お前は学生なんだから、へんな者とかかわりあいになんかなるんじゃないぞ。顔に傷なんかつけられてみる、一生その顔で過ごすんだぞ。」

娘は浩一の顔をにらみ、ウルセーと捨て台詞を残して自分の部屋に引き上げていった。

最近の高校生は親の言うことなんか、へとも思っていないのである。

その週の日曜日である。浩一は床屋に行くことにした。

不景気が続き浩一の給料も減り、妻からもらう小遣いも減った。

そのため駅前に新しくできた1000円カットなる床屋へよく行くのである。

待つこと一時間、ようやく浩一の番となった。

浩一は髭剃りも含まれるちょっと高めの普通調髪を選んだ。

「いらっしゃいませ。」

と担当してくれたのは、まだ二十歳そこそこの青年であった。

てきぱきと調髪を進め、浩一は、まあまあじゃないかと内心喜んでいた。

シートが倒され顔に石鹼が塗られ口元の髭がきれいにそられた。

心地よさに少し眠くなってきた。

カミソリを握る青年は心の中で、あとちょっとだ我慢しろ、と唱えていた。

実は彼は花粉症であった。飛散するスギ花粉でくしゃみをしたくなかったが、

あと瞼だけ当たれば作業が終了するため、必至になってくしゃみをこらえていた。

右目が終わり、最後の左目の瞼となった時、

「ハックション。」

手元のカミソリがすべり、浩一の瞼は丹下作善のごとく、縦にぱっきり切られてしまった。

その夜のニュースで、また花粉症によるくしゃみで顔に傷害者が出たと報道していた。

自殺ど一ぞ

流れ行く車窓の田園風景に、昔家族とともに田植えや稲刈りをしたときのことを思い出していた。

良治は今年55歳になる。

田舎を18歳の時に出て、ずっと東京で暮してきた。

終身雇用制度のもとサラリーマンも悪くなかった。

給料も上がり、結婚し子供もできた。

しかし始めて日本がデフレに見舞われ、良治の会社はあっけなく倒産した。

再就職を試みたが採用してくれるところなぞ無かった。

バブルの時買ったマンションは売るに売れず、ローンだけが残っていた。

妻からは馬鹿にされ、だんだんとこの世から逃避できたらいいなあと思うようになった。

昨夜も夫婦喧嘩である。

良治はこれほど自分を情けなく思ったことは無く、衝動的に手荷物をまとめ、朝早く飛行機に乗ったのであった。

今は地方の鉄道に乗り心静かに外を見ているのである。

目的の山が見えてきた。

「よし、あと少しだ」

と自分にいいきかせた。

駅から山の麓の温泉までタクシーで行った。

運転手は温泉客と思い、気軽に話し掛けてきたが良治は無口のままであった。

その日は温泉で一泊し最後の湯の感覚を楽しんだ。

次の朝良治は山頂目指して登り始めた。

硫黄の臭いが強くなってきた。

やっと山頂についた。四方を見渡し、ああこれでおしまいになるんだと感慨がこみ上げてきた。

周りに誰もいないことを確認し、良治は火口の淵へと歩いて行った。

一飛びで終わりである。

火口の淵には真新しい看板が立っていた。

良治は自殺を思い留ませる看板だと思って読んだ。

「自殺を行われる皆さんへ。

一歩前へ出て、ためらわず火口めがけて、思い切り跳んでください。

途中で岩に引っ掛ても引き上げる予算が村にはありません。」

あっはは、と良治は思わず笑ってしまった。

ここも大変なんだなあと思うと、死ぬことが急にバカらしくなってきた。
良治は温泉に戻り命の洗濯をして東京に戻った。

良い暮らしの本

12月に入り街にはクリスマスのイルミネーションが輝いていた。好夫と過ごした去年の聖夜は夢だったのだろうかと思京子は思った。今年になり京子は好夫に飽きて別れを告げたのだった。その後、付き合った男はいたけど、長続きはしなかった。

会社からの帰り道、今日は冷たい雨が降り続いていた。京子は駅で電車押し込まれた。とりあえずホットして目の前の席に腰掛けている乗客が目に入った。

アレ？好夫？

似ている男が座っている。その男はコートの襟を立て、一冊の本を夢中になって読んでいる。コートの襟が男の顔を隠しているの本人であるのか確認することはできなかった。本のタイトルは手に隠れて全て見えない。見えている文字から想像すると、「良い暮らしの本」らしい。この男がもし好夫だとすれば、去年別れてから何をしていたのだろう。良い暮らしの本？そんな本あんたには似合わないよと思京子は思った。

次ぎの駅でその男は降りた。京子は何となく気になり、意思とは別に勝手に足が動いて電車を下りてしまった。改札へ向かいエスカレーターを降り始めた。京子はその男の後ろに立った。立てたコートの襟からその男の首筋が見えた。アッ。思わず京子は声を出してしまった。そこには、京子が肌を重ねるたびに、これかわいいね、って指先で突っついたハートマークの赤いあざが見えた。その男は好夫である。京子は距離を置いて好夫をつけ始めた。角で好夫は曲がった。京子は角に行き曲がった先を見たが好夫はいなかった。ふと周りを見ると、そこには石屋の敷地がありいろいろな石材が展示してあった。「こっちだよ。」という声を聞いたような気がした。京子の足はそちらに向かった。見れば真新しい墓石がありその上に見覚えのある本が乗っていた。さっき好夫が読んでいた本である。京子の手が伸びその本を手を取った。それは「よい墓の本」であった。墓石を見ると、京子の名前が掘り込まれていた。

キャーと悲鳴を上げた時、後ろから好夫の声が響いた。

「やあ、京子。久しぶりだね。あのあと僕は石屋の娘と懇意になり、今度、この石屋を継ぐことになったんだ。毎日、君の名を刻んだ商品で墓石販売の練習をしているのさ。君のおかげで、よい暮らしが出来るようになったよ。ありがとう。」

ハハハハと好夫の笑い声が響いたのであった。